

## 第9章 段階別の指導目標と内容

### — 高学年（小学校5～6年程度） —

#### 1. 指導目標

高学年での指導目標としては、次の二つが上げられます。

(1) 組織的なゲームができる（ミニ・ラグビーの完成）

(2) よりフェアな態度とフェアプレーの精神を理解させる

そしてこの目標を達成するためのより具体的な目標として、次の三つが上げられます。

①個人スキルをさらにシェイプアップする

②ユニットスキルを理解・遂行させる

③相手そしてレフリーに対し敬意の念を持たせる

ミニ・ラグビーの完成を目指すこの段階では、とかくユニットスキルあるいはチームスキルが優先され、個人スキルがおろそかにされる傾向にあります。しかし、どんな素晴らしいチームプレーも結局はそのプレーに関与するプレイヤーのハイレベルな個人スキルから成り立っていることをよく理解し、個人スキルの重要性を忘れてはなりません。また、中学年では基本的なユニットの役割とその理解をはかりましたが、高学年ではそれをさらに発展させ、ミニ・ラグビーで求められるユニットスキルをより明確に理解させるとともに、その向上をはかります。中学年までに前進、サポート（支援）、継続は指導されました。高学年ではこれに加えプレッシャー（圧力）の理解をはかります。プレッシャーは、防御において相手にプレッシャーを掛けること、攻撃において相手のプレッシャーに屈することなく攻撃を敢行することの二つの意味を持ちます。言葉を変えれば、高学年になるとプレッシャー下のゲームが行われるし、また行われなくてはならないということです。これは中学年でも言えることですが、すべての子ども達が必ずしも低学年からラグビーを行い、高学年を迎えるわけではないことから、そのようなプレイヤーをどのようにして低学年からラグビーをプレーしている子ども達と同化させるかを、指導者は常に考えなくてはなりません。

## 2. 指導内容

### (1) 個人スキルをさらにシェイプアップするためには

中学年までに、一応の個人スキルは扱われました。高学年では、それらのスキルをより早いスピードで、そしてプレッシャー下で行えるようにならなくてはなりません。そのためには、個人スキルの練習において常に相手を意識させ、またプレッシャーのかかった状態で練習する工夫が重要です。

### (2) ユニットスキルを理解・遂行させるためには

高学年では中学年で扱われたユニットスキルを、人数の上でもレベルの上でも発展させます。人数が増えることで味方とのより一層の協同、プレッシャーのかかった状況での相手への対応、プレーのスピードアップと、中学年に比べて混乱を引き起こす要素がいろいろあります。そのような中でミニ・ラグビーに求められるユニットスキルの理解をはかり、遂行できるようプレイヤーを導くためには、プレイヤーの習熟度に合わせた練習状況・条件のコントロール（工夫）が不可欠です。中学年でも述べましたが、たとえ高学年であっても、そしてその子どもが将来ラグビーを続けなければまず間違いなくあるポジションにつくことに指導者が確信を持ったとしても、それでもポジションの固定化・専門化を行うべきではありません。

### (3) 相手そしてレフリーへの敬意の念を持たせるためには

運動能力が向上し、人数が増え、またラグビー経験を重ねるに従って、高学年では小学生とはいえ激しいゲームが展開されるようになります。しかし、自己のコントロールを失うようなことがあってはなりません。高学年では、ゲームを行うには相手がいなくてはならないこと、そしてレフリーがいなくてはならないことを、しっかりと理解させる必要があります。このためには、相手は「相手」であって決して「敵」ではないこと、自分達が楽しむためのパートナーであることを、交流会等の対外ゲームはもちろんのこと、普段のチーム内での競争的な練習においても常に強調することが重要です。また指導者は、レフリーは子ども達がゲームを楽しむのを助ける援助者として存在していることを、子ども達に理解させる努力もしなくてはなりません。ゲームに負けた理由をレフリーに見いだそうとするような態度を子ども達の前で示すような指導者は、問題外と言えるでしょう。このことが理解されれば、

自ずと相手そしてレフリーに対して敬意の念が生まれてくるはずですが。その結果、ゲームが終われば誰に言われることなく自然にお互いに挨拶を交わし、健闘を讃え合い、レフリーに感謝することでしょう。これがラグビー精神の一つである「ノーサイドの精神」です。

### 3. 練習内容

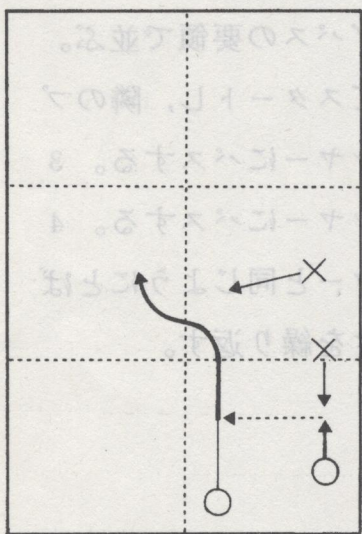
以下に提示するのは、低学年、中学年の積み上げとしてミニ・ラグビーの完成を目指した練習内容ですが、これらはいくまでも例であり、基本的には指導者が自分の目の前にいる子ども達をよく理解し、適切な練習内容を考え、創造していかなくてはなりません。なお、高学年でグリッド練習を行う場合、その大きさは8mが適当と思われれます。また、チャンネルを使う場合やゲームを行う場合は、練習の目的を達成できるよう長さ・広さをよく考えなくてはなりません。

#### (1) 個人スキル

##### ① ランニング

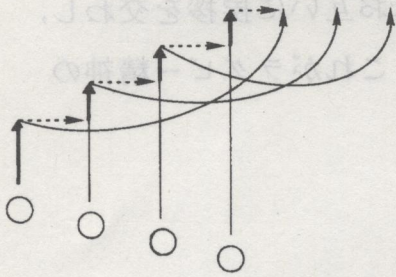
すでに述べたように、高学年では今までに獲得したランニングスキルをより早いスピードで、そしてプレッシャー下で行えるようにならなくてはなりません。また高学年ではボールを持っていないときのランニング、つまりサポートランニング（あるいはカバーランニング）の必要性・重要性を理解させるための練習を行います。

#### 練習1 2対1 + 1



2対1の状況からラストパスをもらって抜け出た攻撃側のプレイヤーに対し、防御者がもう一人現れる。攻撃側がボールを持ってゴールラインを走り抜けば勝ち。一方防御側は両手タッチをすれば勝ち。2番目の防御者のスタートタイミングは、指導者が防御者の肩を叩くことで指示する。2番目の防御者のスタートタイミング、スタート位置を変えることで、相手を抜くためのいろいろなランニングスキルの発揮が期待できる。

練習2 パスアンドサポート

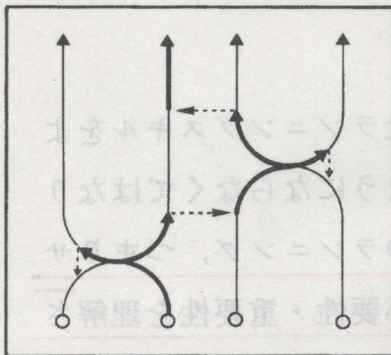


4人でランニングパスを行うが、パスしたプレイヤーはパスの方向にサポートし、ラインの端で再びボールを受け、さらに外にサポートしてくるプレイヤーにパスする。4人がこの動きを繰り返す。

②ハンドリング

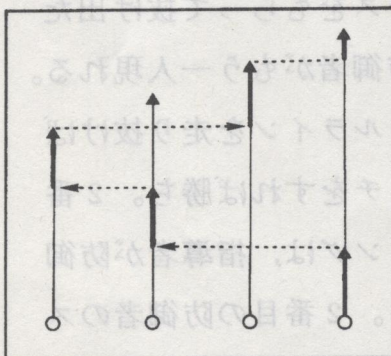
高学年ではスイッチパス、とぼしパス、ループパスなど、多様なパスが出来るよう指導します。また、子ども達は大人のプレーを見て、見様見真似でスピンプスをするようになるかもしれません。子ども達の興味に応じて、適切な指導が必要です。

練習1 スイッチパス



4人一組となり、ランニングパスの要領で並ぶ。端から2番目のプレイヤーがボールを持ってスタートし、外のプレイヤーとスイッチパスを行う。スイッチパスを受けたプレイヤーは立て直して、普通のパスをする。次にパスを受けたプレイヤーは外のプレイヤーとスイッチパスをする。以下同様の動きを繰り返す。

練習2 とぼしパス



4人一組となり、ランニングパスの要領で並ぶ。端のプレイヤーがボールを持ってスタートし、隣のプレイヤーをとぼして3番目のプレイヤーにパスする。3番目のプレイヤーは4番目のプレイヤーにパスする。4番目のプレイヤーは最初のプレイヤーと同じようにとぼしパスをする。以下同様の動きを繰り返す。